調査団体名	NPO法人　やすらぎの里いとしろ・ 石徹白地区地域づくり協議会	団体代表者名	久保田政則（やすらぎの里いとしろ） 石徹白勉、石徹白隼人、石徹白秀也、平野彰秀、 その他、石徹白の方々多数
設立年	2003年11月	団体URL	
活動地域	郡上市白鳥町石徹白	調査員	近藤、清水、田村、桝、森川、宮前洋一・保子
取材日	2010/11/6～7	レポート作成者	清水雅子

子どもたちが住み続けられる石徹白を

＜活動内容＞

○キャンプ場の運営
○会報「まめなかえ」を発行（2カ月に一度）
○石徹白地区の歴史を知る「勉強会」を実施
○石徹白を紹介するホームページ・パンフレットを作成
○「小水力発電」事業を、「ぎふNPOセンター」及び「地域再生機構」と協働で実施
○「地域づくり協議会」と共に、地域の活性化を目指す

＜会のモットー(何を大切にしているか)＞

この地域に石徹白小学校があり続け、石徹白の地に子どもたちの声が響き続けることを第一の目標としている。
また、地域づくり協議会と共に、一対一の関係を基本とした「結い」（≒地域コミュニティー）の再生を目指す。

＜設立から現在に至るまでに変化したこと＞

地域づくり協議会の動きと相まって、石徹白地区の、特に若い人たちが動き始めたこと。地元の婦人会の若い人たちが「くくりひめ」というカフェ（0のつく日に開店）を開いたり、行政主導でつくられたが現在は動いていない「白鳥ふるさと食品加工伝承施設」（自治会管理施設）を復活させる動きがあったり・・・。

＜連携している団体・専門家・自治体など＞

石徹白地区地域づくり協議会、地元の青年団、あけぼの会（老人会）、ささゆりの会（婦人会）、ぎふNPOセンター、地域再生機構

＜今までに行った調査・研究＞

「小水力発電」事業を実験的に実施している。

＜現在直面している課題＞

○人口減少を食い止めたいが、地域の雇用が少ないため、若い人たちが地域から離れていかざるを得ない。
○地元では活動に対する理解がまだ広がっていない。
○「結い」制度がなくなってきて、個人主義が大きくなってきていること。

＜今後やってみたいこと＞

○12人の小学生とお年寄りとの交流。また、それをレストラン「くくりひめ」とセットで実施していきたい。
○今、取りかかっていることを、とにかく一つ一つ確実にこなしていくことで、理解者を増やしていくこと。

＜その他＞

今回、「地域再生機構」の理事である平野彰秀さんにもお話を伺うことができた。彼は近々、奥様と共に石徹白に移住しようとしている。

[平野さんのお話より]

○岐阜市出身、東京で就学・就職していたが、念願であった地方の地域づくりに関わるため、岐阜に戻ってきた。また、2007年に初めて石徹白に出合い、そのときから石徹白に居を構えたいと思った。

○石徹白は商業主義的なところがない。また、日本では珍しいくらい自治の力が残っている。

○石徹白は、皆で何かを一緒に行うという伝統がまだまだ残っている地域。今、地域に足りないのは、住むところと仕事であり、この2つを課題として取り組んでいる。

○県の支援を受けたり、「くくりひめ」の人たちがカフェを運営したり、“特産品”を開発する動きが始まっており、かなり進んできている。

○もう一つの課題として、農産物がないと特産品はつくれないので、就農希望者を募っていく。

地域づくり協議会の皆さん

水力発電装置

＜執筆者の感想(心に残ったこと)＞

[石徹白に滞在した感想]

○「やすらぎの里いとしろ」の方々に限らず、地域づくり協議会や婦人会の方々など、それぞれが思いを持っていたのだが、それが高まってきたときに地域外からの刺激を呼び込み、みんなの思いが開花し始めたのだろうと、勝手に推測しています。それは、石徹白の人たちの人間性、まっとうな生き方(次の世代のことを一番に考えつつ、目の前のことにコツコツとじっくり取り組む)に由来するものだと思いました。

○石徹白の方から見れば、ぎふNPOセンター、地域再生機構、若い嫁衆は、皆“よそ者”ですが、石徹白地区の多くの方々が彼らを受け入れています。少なくとも、彼らを排除しようというような動きは見えません。この地域には、よそ者を対等に受け入れ付き合っていく土壌があるのでしょう。

○今回の訪問では、隔年開催である「ふれあい文化祭」を見学させていただきました。第11回目となった「ふれあい文化祭」ですが、ここまで続けるために、長らく公民館長を務めていらした船戸先生がご尽力をされたそうで、文化祭の冒頭で船戸先生への感謝状の贈呈がありました。ずっと骨を折ってくださっていた大先輩がいて、今、若い人たちが引き継ぎ、新しい“結い”をつくっていこうとしている、またそれを多くの先輩方が集い温かく見守る、という光景に、体の芯から熱くなるような思いでした。

今回の石徹白訪問では、石徹白の人々の(自分自身に)素直で素朴で飾らない、未来を向いた生き方に非常に感銘するとともに、これが本来あるべき人間の姿ではないかと思いました。都市に住んでいるから、また都市化の波が押し寄せてきたから、本来の生き方を見失ってしまったのでしょうか？　未来の世代のために地域と共に、という“結い”の精神は、名古屋でも再生することができるのでしょうか？

石徹白からの帰り道、日本にこんな素晴らしい地域があったのかというううれしさ、すがすがしさを覚えるとともに、一方、私たち都市住民が何と引き替えに“結い”の精神を失ってしまったのか、次の世代のためにどういう地域社会をつくり残していけばよいのか、という大きな課題も持ち帰ることになりました。

書きたいことはたくさんあるのですが、伝えられる文章がなかなか書けませんでした。とにかく、多くの人が石徹白に行って、その雰囲気を肌で味わっていただきたいと思います。